

インタビュー

学ぶ

学校で教えてもらうことだけが「学び」ではない。
本やパソコンから伝えられる情報だけが「情報」でもない。
自分の身体を使い、自分の手のひらから学びとる何物か。
それはどんなときでも失われることがない。
職人の世界を極めた宮大工の棟梁・小川三夫氏の教育論は、
現代だからこそ新しい。

小川三夫

宮大工・「鰯工舎」主宰

Mitsuo Ogawa

取材・文千葉 望
写真栗原克己



鵜工舎の工房がある奈良・斑鳩の里。
工房の二階からあたりをながめると、
いちじくなどの畑が広がる。その向
こうには法輪寺三重塔が見えた。

法隆寺五重塔を解体修理したことで知られる名工・西岡常一氏^{つねかず}。西岡氏は生涯でひとりだけ弟子を取った。それが小川三夫氏である。今「鵜工舎」を運営し、二〇人以上の職人を抱える小川氏は、弟子の育成や人間教育にも一言言っている。それは封建的とされる徒弟制度を徹底的にやること。共同生活から生まれる優しさや、ひとつのことに脳目もふらずとりくむ努力が、すぐれた職人を育てるのだ。優雅な屋根のカーブが美しい法輪寺三重塔を望む工房で、ヒノキの香りに包まれながら小川棟梁にお話をうかがった。

記憶力がなかったから師匠に会えた

——鵜工舎のある奈良・法輪寺界隈

はい庭のある伝統建築の家が多くて、時間がゆったりと流れているようです。現代は私たちおとなも人生に迷っていますが、若い人たちはもっと迷っていて、何としても自分のやりたいことを見つけなければいけないと思ひ込んでいるようなフシがあります。それでフリーターになったり、ぶらぶらしている。棟梁のように天職に出会った方には、彼らはどのように見えるのでしょうか。

小川 それは今の勉強と同じですよ。今の人はほとんどが、勉強の意味を知らないままやっているんじゃないかね。自分の時代には、勉強の前にまずやるべき生活があった。家に帰ってくればまず家の

仕事をして、それから遊びに行つて、夜ちょっと勉強するぐらい。今は生活がなくて、帰ってきたらすぐに勉強でしょ。ですからいろんなことに気づかない。生活をしていたら、フリーターなんて絶対出ないような気がするな。

——あまり観念的に自由だと、親や先生に「自分のしたいことを探せ」といわれても迷ってしまうんじゃないか。一方で勉強は、何のためにやっているのかわからないままやらなくてはいけない。

小川 私の場合、高校時代の成績は五人中五五番目ですからね（笑）。もともと工業高校に行きたかったのに、銀行員だったオヤジが普通高校に行けという

からしかたなく行っただけ。意欲が湧かないわけですよ。だけ

ど修学旅行で法隆寺の五重塔を見たとき、案内してくれた人が、「この塔は一三〇〇年前に建ったものですよ」と言った。それを聞いた瞬間、一三〇〇年前にどうやってこんな大きな木を運んできたんだろう、それをどうやって上げたんだろうと思ひ、「それならこの仕事をしたらいじゃないか」と思いついた。成績が悪くて、先生からは「オマエは絶対進学できない」と言われていたけど、この飛鳥人の血と汗を学んだほうが大学に行くよりも価値があると思つたんだね。ただ、素地はあつたかもしれない。それまでも刀鍛冶とか鯨職人がいいかなと思つたことはあつたから。

身体で覚え頭に届ける訓練が大事

——職人への憧れは潜在的に持つていらしたんですね。

小川 そうですね。それで奈良に来たときには、まず県庁へ行きまして。「ここでこういう仕事をしたいのでお世話願います」と頼んだら、西岡櫓光^{なるみつ}という棟梁が法隆寺にいるからそこを訪ねろと言われたんです。ところがこっちは五番目の頭だから、法隆寺にきたときには西岡という苗字しか覚えてない。「西岡誰だ？」と言われても答えられないでいると、「西岡は俺だ」と西岡常一棟梁が出てこられたんです。櫓光さんは常一さんのお父さんで、その頃八〇歳ぐらいでした。ですから私がちゃんと名前を覚えていて弟子入りを願つても断られたでしょう。忘れたから常一棟梁と出会った。そこからへん、運があつたですね。

——西岡常一さんという棟梁は、小川さんがご覧になるとどんな方だったんですか。

小川 よくそう訊かれるのですが……。私にはよくわからない。

というよりも、弟子と師匠だったからわからなくて当たり前じゃないかと思うんです。何しろ何もかも師匠と一緒になんです。そうすると気づかないんだわ。

そういうふうにならなくては嘘だと思ふね。

ただ、とにかく自分自身に厳しい人でしたね。厳しく厳しく生きた人が感じ得た本当の優しさを持った人でした。厳しさのない優しさは甘えにつながります。ですから棟梁と一緒にいても何も教えてくれませんでした。弟子入りしてから最初に言われたのは「納屋の掃除をなさい」ということ。それで納屋に入ってみると、引きかけの図面があったり、夜なべ仕事で作った小さなものがあつたり、道具が置かれていたりするわけです。道具を見てもよろしいということなんだね。これで自分は弟子入りが認められたと思いました。次に言われたのは、これから一年間テレビ、新聞、ラジオ、そういうものに一切目をくれないけない、刃物研ぎだけをしなさいということ。言われたとおり三カ月間刃物研ぎだけを続けていると、棟梁が上がつてきて鉋屑かんくずとはこういうものだといつて、すーっと台鉋を引いてみせてくれました。それこそ真綿を広げたようなすこい鉋屑で

す。それを窓ガラスにはって、そういう鉋屑が出るように、毎日研いでは削り、研いでは削りの一年間を過ごしたんです。そのあと二〇年間一緒にいたけれど、何も教えてくれなかったですわ。でも、そばにいたからいろんなことに気づいた、感じた。わかったですね。

——そういう長いおつきあいの中で、小川棟梁が思っていたらしたのはどんなことでしたか。

小川 それは、師匠を絶対的に信頼すべきだということですね。師匠を批判的な目で見てみると、徒弟の関係はなくなる。たいがいの人は師匠がどうのこうのと言う。だけど、そういうのは勉強した人ですよ。学問をしてしまうとだめですわな。ずっと一緒にいて、お互いに面倒くさくない。そうなければいけません。西岡棟梁は「法隆寺に鬼がいる」と言われるほど、怖い人だったとみんながいます。だけど私はひとつも怖いと思わなかった。びったりくっついていたら怖いと怖いことはその人から離れているからなんです。やっぱ

おがわ・みつお●1947年栃木県生まれ。高校卒業後、三度追い返されながらも、とうとう西岡常一棟梁唯一の内弟子となる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔の再建に副棟梁として活躍。77年鶴工舎を設立し、全国の寺院の修理・改築・新築に携わる。著書に『不揃いの木を組む』などがある。



り職人というのはそういう生き方ができなくちゃいけない。そして、風を感じられなくちゃいけない。

西岡棟梁はよく言っていました。人とすれ違ったら風が起きる。その風でこの人はどういう人かと判断できなかつたら、棟梁は務まらない。なぜかといえば、棟梁はすごい人数を使うんです。大工だけじゃなく、石をすえる、製材する、

壁を塗る人がいる、いろいろでしょ。全部違う人を一気に使わなくちゃいけない。だからその人の風を瞬時に判断できなくちゃだめですわな。そのためには先人観を持つてはいけません。

だから私は何の学問もないけれども、本当に素直に世の中を見たらいろいろなこと、見えるし、いろいろなことに気づく。やっぱ素直がいちばんですね。素直に見て、素直にモノに触れ

る、それさえできれば何にも怖いものはない。

——今は情報が氾濫はんらんしすぎていて、そういうふうはこの情報と知識が関連しているなんて言われると、気分がふさいできます。

小川 そうでしょうな。そういうところから判断したって、おそらく本当のものなんか見えないですよ。

弟子もね、最高の弟子は素直な子です。疲れませんかね、教えるほうも教わるほうも。そして、中途半端な教育を受けてきた人はなかなか職人になれない。本当の教育までいかないと、いいことはないですよ。うちの子を見ると、みんな優しいですよ。優しくなつたんです。何十年と本当の修業をした子は、人とか物のありようを正しく判断しますね。そしてまたそのこ

昔取った杵柄で槍鉋を引いてみせる小川棟梁。鉋屑はさすがの薄さ。よく研がれた鉋は鋭く光ってこわいほどだった。大工の修業は道具を研ぐことから始まるというが、大所帯で共同生活を行う鰯工舎では、これに全員の食事作りが加わる。



とに対して優しく接する気持ちになるんです。そこまで教育しなくちゃ駄だと思えます。

——逆に言えば、私たちはどこが曇っているんでしょうか(笑)。

小川 その知識や情報が、自分が得たものではなくて外から入

共同生活が本当の優しさを作る

——棟梁のところには年間二五〇人もの弟子入り志願者がくるそうですね。ところが採用するのは二、三人。どういう基準で選んでいるのですか。

小川 私の気分がいいときにきた人を採る(笑)。それも運だ。だけど、選び抜いたはずの三人だっただけこぼこはあるよ。その

ってきたものが多いからじゃないですか。自分たちの場合、外から入ったものは何もないんです。自分が覚えて、自分ができなくちゃ何ならない。だから情報なんてものは、ひとつもこの世界では通用しないんです。言い訳しないのが職人。そんな世界にいると、曇った人はいられないということでしょう。普通の一般的な知識から得たもので生きている人は、そりゃあ不安でしょう。決断力もないだろうし。棟梁は、即、決断できないとだめなんです。「ちよつと待ってや」なんてやっていたら、職人さんたちは呆れちゃう。

なかで根性があって、いい職人になるのは昔暴れていたような子ですね。学校の成績がよかったなんていう子は頭で考えてしまっただけで風を感じることができない。身体で感じて、頭に伝えられなくちゃ。

だって、奈良の都を造った人なんて、六〇年で成し遂げたわ

けですよ。あれほどのものを造った経験のある人はいなかったのに、なんとかして造り上げるんだという一念でやり遂げたわけですよ。東大寺だってそうですよ。技術じゃなくて、気持ちが大事ななんです。だけどそういう力を沸き立たせるものが今はないでしょう。全員に同じことを教える。奈良に修学旅行にくるときも知識で頭がいっぱいになっているから、全員が同じ見方になっちゃう。柱がエントシスだとかね。器用な子は先生からみれば優秀かもしれない。しかし、自分から見たら、頭の中が器用だなんて褒められたことじゃないです。

——だいたい私も子供の頃から器用貧乏だったから、棟梁にそういうわれると頭が痛いのですが、お母さん方も子供の育て方を急ぎすぎているような気がします。

小川 そうですよ。父親は生活するのになんて一所懸命やったらい、だけど母親が暇になってしまっただけで母親が暇になってしまっただけでその矛盾を子供に向けたために子供をダメにしているような気がするな。成績はわかりやすいから。うちあたりでもこんなことがあ

りました。早稲田の文学部の子と中学生がきたんです。面接して、中学生を採用しました。落とされた理由を早稲田の子に尋ねられたので、「あなたは二二歳でまだ心が定まっていけない、この子は一五歳でこの道にこようというんだから、こっちを採用します」と言ったんです。大学生はほかでも生きていく能力があった。そういう子は一〇年間修業していて、苦しくなったらほかを見てしまう。能力がなかったらこしか見られない。そういうほうがいいんです。家から放り出されたとか、町にいられなくなつたなんてのはいいですね。若いうちに道を踏み外しそうな子になった子は、いざとなったらものすごく頑張る。私もそうだし、うちの長男もそうだね。長男に言わせれば、「俺はオヤジほど悪くなかった」ということになるんだけど(笑)。

——弟子入りすると最初にまず何を教えるんでしょう。

小川 最初は何もできないんだから、飯炊きと掃除ですよ。一〇人ぐらいの共同生活だと、買い物に

学ぶ

日本銀行情報サービス局長・湯本崇雄と談笑する小川棟梁。湯本が手にしているのが棟梁の引いた鉋屑である。工房はヒノキの香りでいっぱいだった。



行っても四袋ぐらい提げて帰ってきます。そして、うちでは食事の支度に三〇分しか与えないんです。そうするとできることが限られるから、前の晩下拵えをする。段取りを考える。それが仕事にも役立つんです。思いやりも育ちますね。みんなの体調のことを考えると、思いやりがなかったら、いいおかずは作れません。そういうことをさせて、よく見ていると、その子

がいい職人になるかどうかかわりますよ。こういう共同生活をしなければなら、本物なんか伝わらん。私はこれが最高の教育だと思っています。徒弟制度のいいところはそれですよ。

——個室で育った今の子供たちが共同生活をするのは大変でしょうね。

小川 そうですよ。急に大部屋

ですから耐えられなくて、アパートから通いたいというのがあります。でもそれでは教育にならない。一緒のメシを食って、一緒の場所に寝る。そうなることある程度のところまできたときに自然に優しくなります。ものを持つときも、自然に力のあるものが重いほうをすつと持つようになるんですよ。

——棟梁は今後「こうしたい」という夢を何かお持ちですか。

小川 夢ねえ。若い子も育ってしまつたしなあ。

やっぱりできることなら、落慶法要も終わり、「今度の解体修理まで三〇〇年ぐらいあるけれども、そのときも鶴工舎が解体修理をする」ってことかな。これは私じゃなく、うちの若い子が言ったんですけれどね。そうすると、自分たちのやった建物が本物であったかニセモノだったか、はっきりとわかるわけです。今、どんなに一所懸命やっけていてもわからないんですよ。西岡棟梁は飛鳥の工人と会話をしながら法隆寺の解体修理をしました。考えてみると、法隆寺

はできてから一三〇〇年解体修理をしていなかったから、当時の技術は伝わっていなかった。それを、西岡棟梁が解体をしながら、飛鳥の工人と心の会話をして、当時の技術を蘇らせたわけです。私はこれこそが伝統だ

一〇〇〇年後のために木を育てよう

——ただ、大きな問題があるそうですね。法隆寺ほどの建物を支える柱となる木が日本にはないのだから。

小川 そうです。法隆寺の金堂で使った柱は六〇〜六五センチで芯がないんです。直径一・五メートルぐらいの大きな原木を四つに割って使っているんだけど、今ほそれだけの木がない。この柱も風雨に晒されていくうちに根元が腐るんですが、そうするとそこを切って、別の木で根接ぎをするんです。その材料がもう日本にはない。外国から買うしかないとなったら、何が文化国家ですか。国宝に外材で接木をするなんて。そのようないやうに、文化財

と思うんです。私が西岡棟梁から受け継いで弟子に伝えた、そんなものは伝統でも引き継ぎでもない。今やった仕事を何百年後かに見た人が、自分たちの苦労や知恵を読み取ってくれる。それが伝統だと思うね。

を所有している寺社は次の修理に備えて木を育てるぐらいのこととはしなきゃいけませんよ。伊勢神宮では式年遷宮に備えて、長い時間をかけて森を育てていると聞きます。

——国民はいくらでもそういうこと、たとえば一〇〇〇年後に心柱となる木を育てるためなら協力すると思いますが。

小川 そうかもしれない。でもそのためにはまず寺が音頭をとってそれを皆で協力し山を育てる体制を作らないとね。

——それができたら日本も変わっていくかもしれませんね。本日はありがとうございました。

聞き手／日本銀行情報サービス局長

湯本崇雄